様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　６ 月 １９ 日現在

機関番号：３２６３１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2017～2023
課題番号：１７Ｋ０２７８７

研究課題名（和文）副助詞を中心とした日本語文法史の多角的研究

研究課題名（英文）A multifaceted study of the history of Japanese grammar focusing on adverbial particles

研究代表者
小柳　智一（KOYANAGI, TOMOKAZU）

聖心女子大学・現代教養学部・教授

研究者番号：８０３８０３７７

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,000,000円

研究成果の概要（和文）：　本研究の成果は大きく3つある。1つは、文法変化の理論的研究に関する成果である。複雑な変化過程のモデル化、群で起こる変化の仕組みの解明、文献資料に残った「孤例」の性質の分析を行った。2つめは、古代語の副助詞の記述的研究に関する成果である。文法変化研究の成果を応用した副助詞の形成過程の推定、現代語の「とりたて詞」研究との対照による古代語の副助詞の再整理、体系からはずれた違例的な孤例の解釈を行った。3つめは、近世文法研究の日本語学史的研究に関する成果である。富士谷成章『あゆひ抄』の分析、鈴木朗『言語四種論』の読解を行い、先行研究の誤りを正すだけでなく、現代の研究にとって有効な示唆を得た。

研究成果の学術的意義や社会的意義
　本研究の学術的意義は、複数の観点を組み合わせ、副助詞を含む日本語文法史を多角的に考察したことである。副助詞を取り上げる場合、従来は単一の観点から個別に観察するものがほとんどで、それを共時的観点か通時的観点の一方を選んで記述していた。本研究は、副助詞を文法変化一般の中で考察し、課題ごとに共時的観点と通時的観点を切り替え、近世文法研究の成果から反照させるなど、これまでにない奥行きで研究することができた。
　また、近年言われる日本の言語伝統の見直しに関連して、古典文学作品の読解に資する成果が得られたことと、古典文法教育と古典文法研究をつなぐ視点を提示できたことには、社会的意義もあると考える。

研究成果の概要（英文）：This study has three major contributions. First, the study contributed to the theoretical study of grammatical change by modeling complex processes of change, revealing the mechanism of change occurring in groups, and analyzing the nature of “hapax legomena” that deviate from the systematized form. This study also yielded results in the field of descriptive research on adverbial particles in ancient Japanese. Results include the estimation of the formation process of adverbial particles by applying methods of analyzing grammatical change, the reorganization of ancient adverbial particles by contrasting them with toritate in modern Japanese, and the interpretation of “hapax legomena”. Lastly, through the reading of the works of Fujitani Nariakira and Suzuki Akira, this study not only corrected misinterpretations in the previous studies, but also obtained useful suggestions for current research, making contributions to the study of the Japanese linguistics history in the Edo period.

研究分野：日本語文法史

キーワード：副助詞　文法変化　機能語　語構成　主観　孤例　類推　日本語学史

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

大きく 2 つの学術的背景があった。1 つは、副助詞研究に関する状況である。現代語の「とりたて詞」研究が普及した影響で、副助詞はとりたて詞に置き換えられ、副助詞を「副詞性の助詞」と見る伝統的な副助詞観がほぼ忘れられていた。この副助詞観は富士谷成章―山田孝雄―森重敏という系譜をなすもので、この副助詞観を再評価し、そこから導出される様々な観点に立って研究を発展させることが求められた。

もう 1 つは、文法史研究に関する状況である。通言語的研究や類型論的研究が盛んになり、そこから「文法化（grammaticalization）」理論が現れ、この理論に即して具体的な現象を分析する動向があった。文法化理論は主に外国語を対象に理論化されたものだが、それをそのまま日本語文法史にあてはめる研究も多く見られた。しかし、過度な一般化や例外、理論の考察範囲から漏れる現象のあることが多々指摘され、日本語文法史の具体的な事象から再検討する文法変化の理論的研究が求められた。

２．研究の目的

上記 2 つを背景としながら、個別的／体系的、個別言語的／通言語的、共時的／通時的、理論的／実証的、日本語史的／日本語学史的などの複数の観点を組み合わせ、副助詞を中心とする日本語文法史の現象を多角的に研究することを大きな目的として掲げた。これをテーマとして、その下に具体的に設定したのが次の 3 つの課題である。

(1) 文法変化の理論的研究：一般的傾向の整理と理論的位置づけ
(2) 古代語の副助詞の記述的研究：個別語彙の記述と体系的な把握
(3) 近世国学の文法研究の日本語学史的研究：再検討と新しい観点の発掘

３．研究の方法

本研究の方法的な主眼は、複数の観点を統合させる点にある。例えば、目的(1)に関しては、傾向を探究する一般的なレベルと具体例を観察する現象的なレベルを、「事例化」という考え方によって結び、両方を視野に入れて考察した。目的(2)に関しては、個々の副助詞の記述を必ず副助詞の体系に位置づけることを視野に置いて行った。目的(3)に関しては、日本語学史上重要な著作の記述を一字一句追う微視的な解釈と同時に著作全体の中での意義の計測を行い（著作の一部だけを切りとって読み取るのではなく、著作全体の中で読むことは常識的な読解法だと思うが、これまでの研究では必ずしも実践されていなかった）、かつ記述されている内容を日本語史的な事実と照らしながら読解した。

なお、複数の課題の開始時期に差を設けながら並行して進めた。取り組む問題を矮小化せず、場当たり的な解決を防ぐためには、他の課題へ開かれた思考が必要であり、複数の課題を並行して行うのは、このような体制を作るのに有効だからである。

４．研究成果

(1) 文法変化の理論的考察について、主に次の研究成果を得た。

1) これまでの研究は新たな文法形式や意味が創り出される「生産」に関心が集中していたが、その逆の「消失」を取り上げた。使用されていた文法形式や意味が消失する過程を捉えるために理論的モデルを構築し、どのようにしてなぜ消失するのかを説明した。さらに、消失のモデルと、すでに発表してある生産のモデルを統合し、「競合」「交替」「分化」を含む複雑な変化過程を整理した。この研究を、前年度までに行った一連の研究に合わせて『文法変化の研究』（くろしお出版、2018）を刊行した。

2) 機能語生産（新たに機能語が作られること。何を資材としてどのような機能語が作られるかによって類型化される）の類型に、時代差による生産性の差があることを指摘した。内容語の「機能語化」と、機能語の「多機能化」は、通時的に一貫して有力な類型だが、機能語同士が複合する「複合機能語化」と、派生接尾辞の「昇格機能語化」はそうではない。昇格機能語化は、古代の文献時代以前には活発に生産されたのではないかと推定されるが、その後しばらくはなく、中世以降に再び散発的に見られるようになる。

3) 群で起こる文法変化の仕組みを考察した。これに関連するものに「類推」があり、言語学の基礎的な概念だが、意外なことにH・パウル（1846-1921）、F・ド・ソシュール（1857-1913）以降、詳しい検討はされてこなかった。「類推」の中心的な装置である 4 項比例式を取り上げ、亀井孝（1912-1995）の「群化」の概念と統合し、類推＝群化の本質を明らかにした上で、語群が本質的に有する特徴に基づいて、群で起こる変化の仕組みを説明した。

4) 日本語文法史の研究では文献資料の調査が欠かせないが、時に出会う「孤例」には検討するべき問題がある。資料に見える「孤例」はどのような言語現象の反映として解釈することが可能か、という問題を理論的に考察し、「規範形の孤例」「俗用形の孤例」「古体形の孤例」「臨時形の孤例」の 4 つの場合が考えられることを指摘した。

5) 近年話題になることの多い「主観性」の用語法を再検討し、現代の日本語研究では「意味

特徴としての主観」「事態把握としての主観」「視点配置としての主観」「言語運用としての主観」の 4 種類が紛らわしく併存することを指摘した。これらを区別しないせいで生じる混乱があり、区別を自覚すれば、容易に解決される問題がある。例として「心的用言の人称制限」と「主観化」を取り上げて解説した。

(2) 古代語の副助詞の記述的研究について、主に次の研究成果を得た。

1) 副助詞と密接に関係する品詞である「副詞」について論じた。副詞の意味的な本質（これが副助詞と共通する）を、様相性と量性を表す点に見出し、それに基づいて、「程度副詞」「陳述副詞」という真に副詞らしい副詞から他の副詞へ放射的に広がる副詞の体系的な捉え方を提案した。さらに、副詞を生産する際の資材について考察し、名詞が副詞化する統語的環境として、連体修飾と挿入句があることを指摘した。

2) 古代語の副助詞を通言語的な「とりたて助詞」研究の枠組みで、現代日本語と対照的に記述する研究を行った。「限定―反限定」「極端―反極端」「類似―反類似」という通言語的な対立の枠組みに依拠して、古代日本語の副助詞を記述し、日本語文法史的に見て「反限定」(「など」）の出現と「反転的な限定」(「しか～否定」）の出現が大きな出来事であることを解説した。

3) 第 2 種副助詞「だに」「すら（に)」「のみ（に)」「さへ（に)」を語構成論・語形成論的に考察した。一部の副助詞を名詞の機能語化したものと見る（根拠不明の）通説があるが、それを排して、接尾辞が昇格機能語化したものである可能性を指摘した。古代語の接尾辞には「語幹的接尾辞」と「語尾的接尾辞」があり、これらの接尾辞が発達して副助詞が形成されたと推定した。

4) 中古語の副助詞「さへ」の記述的研究を行った。「さへ」は従来「添加（または累加)」の助詞とされてきたが、その内実は必ずしも明確に把握されていなかった。そこで、「さへ」は、ある状況において、時間的・価値的に自存する事態を前提とし、それと同領域の当該事態が付随的に存在することを表し、「添加」とは、自存する主要な事態に、副次的な当該事態を付け加えて提示することを言うことを明らかにした。また、一般に「さへ」は「だに」と関係づけられているが、そうではなく「のみ」と関係づけるのが体系的に正しいことを指摘した。

5) 副助詞の相互承接の孤例について考察した。『土左日記』に「かもめさへだに」とあるのがその例で、これが中古語の副助詞の体系から外れた違例、すなわち「臨時形の孤例」であることを証し、その上でこの孤例が孤例であることの意義を探った。結果、文学作品の技巧と深く関わるものであることを指摘し、日本語文法史研究が隣接領域の古典文学研究に貢献し、架橋する成果を提示できることを示した。ちなみに、古典文学研究者からは肯定的な反応があった。

(3) 近世国学の文法研究の日本語学史的研究について、主に次の研究成果を得た。

1) 富士谷成章『あゆひ抄』(1778 年刊）は非常に高度な文法理論を有しながら、独特の用語と簡潔すぎる説明のせいで、十分な読解がなされていない。不審な点も多い。ある種の接尾辞・終助詞・形式名詞が一括された「隊」という一類もその 1 つで、これが何を根拠にまとめられた一類なのか、よくわかっていなかった。『あゆひ抄』全体の組織と記述の精読を通して「隊」の内実を明らかにし、さらに「形式副詞」という現代の研究でも重要な観点を抽出した。

2) 日本語文法研究にとって基本となる「活用」について、近世国学者の重要な著作を再検討し、従来と異なる活用研究史を見出した。鈴木朗『活語断続譜』(1803 年頃成）と本居春庭『詞八衢』(1808 年刊）は「活用形」の見方が異なり、前者から後者への影響は認めがたく、『御国詞活用抄』からそれぞれ独自に発展したと考えられる。また、富士谷成章『あゆひ抄』の影響は両書に見出せない。

3) 鈴木朗『言語四種論』(1803 年頃成）の「テニヲハ」について詳細に検討した。朗の「テニヲハ」は、感動詞・副詞・助詞・活用語尾・助動詞を含み、現代からすると雑多な集まりに見える。これを「主体的な表現」とした時枝誠記（1900-1967）の解釈は有名で、通説になっているが、誤りであることを指摘した。朗の理論に近代西洋的な「主客二元論」はない。また、朗の「テニヲハ」が荻生徂徠（1666-1728）と本居宣長（1730-1801）の影響下にあり、それゆえ雑多であることを指摘した。この研究については継続する予定である。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計11件（うち査読付論文　11件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　1件）

１．著者名 小柳智一	４．巻 24
２．論文標題 鈴木朖の「テニヲハ」―『言語四種論』読解・続―	５．発行年 2024年
３．雑誌名 近代語研究	６．最初と最後の頁 187-211
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 小柳智一	４．巻 87
２．論文標題 かもめさへだに―副助詞の相互承接の孤例―	５．発行年 2024年
３．雑誌名 国語研究	６．最初と最後の頁 49-65
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 小柳智一	４．巻 23
２．論文標題 鈴木朖の「心ノ声」―『言語四種論』読解―	５．発行年 2022年
３．雑誌名 近代語研究	６．最初と最後の頁 115-138
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 小柳智一	４．巻 6
２．論文標題 類推・追	５．発行年 2022年
３．雑誌名 日本語文法史研究	６．最初と最後の頁 107-131
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 小柳智一	4．巻 100(4)
2．論文標題 中古の副助詞「さへ」―〈添加〉の意味―	5．発行年 2023年
3．雑誌名 国語と国文学	6．最初と最後の頁 3-16
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 小柳智一	4．巻 9（第1冊）
2．論文標題 文法史と文法史研究―「古典文法」の背後にある面白さ―	5．発行年 2021年
3．雑誌名 信州大学人文科学論集	6．最初と最後の頁 1-12
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 小柳智一	4．巻 5
2．論文標題 機能語の資材―昇格機能語化と複合機能語化―	5．発行年 2020年
3．雑誌名 日本語文法史研究	6．最初と最後の頁 227‐250
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 小柳智一	4．巻 22
2．論文標題 「活用形」の論理―『活語断続譜』と『詞八衢』―	5．発行年 2021年
3．雑誌名 近代語研究	6．最初と最後の頁 137‐156
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 小柳智一	4．巻 39
2．論文標題 副助詞の形成―「に」を有する一群―	5．発行年 2019年
3．雑誌名 万葉集研究	6．最初と最後の頁 113-159
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 小柳智一	4．巻 58
2．論文標題 弧例の問題―規範と文法変化―	5．発行年 2019年
3．雑誌名 国語学研究	6．最初と最後の頁 未定
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 小柳智一	4．巻 4
2．論文標題 分類の深層―『あゆひ抄』の隊から―	5．発行年 2018年
3．雑誌名 日本語文法史研究	6．最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計2件（うち招待講演　1件／うち国際学会　0件）

1．発表者名 小柳智一
2．発表標題 鈴木朖の「心ノ声」と「テニヲハ」―『言語四種論』読解―
3．学会等名 2020年度第１回近代語学会
4．発表年 2020年

１．発表者名 小柳智一
２．発表標題 機能語の資材―古代と近代の対照―
３．学会等名 NINJALシンポジウム「日本語文法研究のフロンティア」（招待講演）
４．発表年 2019年

〔図書〕　計4件

１．著者名 天野 みどり、早瀬 尚子、小柳智一、小野寺典子、柴﨑礼士郎、大橋浩、渡邊淳也、本多啓、益岡隆志、青木博史、井本亮	４．発行年 2021年
２．出版社 くろしお出版	５．総ページ数 296
３．書名 構文と主観性	

１．著者名 森雄一・西村義樹・長谷川明香・石塚政行・長屋尚典・李菲・三宅登之・小嶋美由紀・相原まり子・西山佑司・高橋英光・加藤重広・眞田敬介・大橋浩・野村剛史・小柳智一	４．発行年 2019年
２．出版社 くろしお出版	５．総ページ数 336
３．書名 認知言語学を拓く	

１．著者名 野田尚史・茂木俊伸・小柳智一・中西久実子・狩俣繁久・鄭相哲・井上優・峰岸真琴・原真由子・今村泰也・プラシャントパルデシ・桐生和幸・岸本秀樹・林徹・米田信子・大澤舞・筒井友弥・デロワ中村弥生・ユラマテラ	４．発行年 2019年
２．出版社 くろしお出版	５．総ページ数 368
３．書名 日本語と世界の言語のとりたて表現	

１．著者名 小柳智一	４．発行年 2018年
２．出版社 くろしお出版	５．総ページ数 304
３．書名 文法変化の研究	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関